

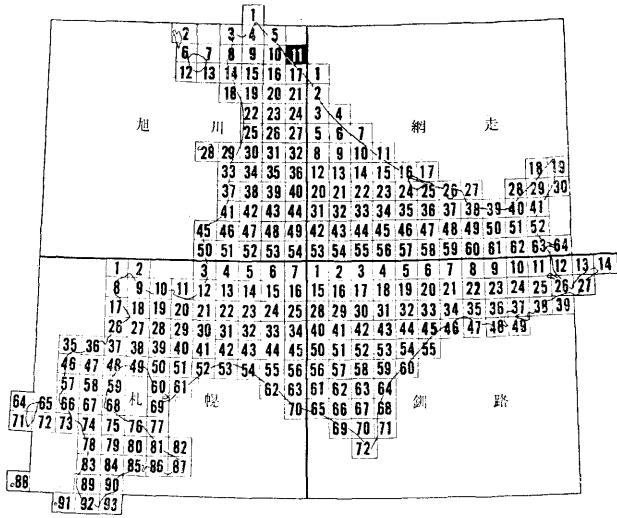
5 万分の 1 地質図幅  
説 明 書

# 浅茅野台地

(旭川一第 11 号)

北海道立地下資源調査所

昭和 40 年



5 万分の 1 地質図幅  
説 明 書

# 浅茅野台地

(旭川一第 11 号)

技術吏員 松 下 勝 秀

北海道立地下資源調査所

昭和 40 年 3 月

## 目 次

はしがき	1
I 位置および交通	1
II 地 形	2
III 地質概説	2
IV 洪 積 世	3
IV.1 浅茅野層	3
V 現 世	4
V.1 砂 堤 列	4
V.2 泥 炭	5
V.3 砂 丘	6
V.4 海浜堆積物	6
VI 応用地質	6
文 献	6
Résumé (in English)	7

北海道立地下資源調査所  
技術吏員 松 下 勝 秀

### はしがき

この図幅説明書は、昭和 39 年 5 月に約 10 日間でおこなった野外調査の結果を、取りまとめたものである。

東天北の浜頓別から鬼志別にかけては、ゆるやかな丘陵地形や、段丘地形が発達し、また、沖積湿原も広く分布している。この地域には、早くから開拓が進められた。しかし、地形的に恵まれてはいるが、気象的に、また土壌的に制約を受け、農産物にはあまり恵まれていない。近年になり、寒地農業のあり方として、大規模酪農をめざし、草地の開発が国策として取り上げられた。それに伴い、土壌の成因的研究調査、および、土壌の改良工事が進められている。

この図幅地域には、まえにのべた各地形のうち、段丘地形、沖積湿原などが分布している。そのうち、段丘地形地域の開発は比較的進んでいるが、その他は、ほとんど未開発である。今後、湿原や砂地の開発も、推し進められるべきであろう。

この説明書の取りまとめに当たっては、北海道開発局北川芳男氏からいろいろ御教示をいただいた。ここに厚くお礼申し上げる。

### I 位置および交通

この図幅は、北海道北部のオホーツク沿岸に位置していて、東経  $142^{\circ}15' \sim 142^{\circ}30'$  および北緯  $45^{\circ}10' \sim 45^{\circ}20'$  の範囲である。しかし、ほとんどが海域で、陸地は南西隅にあり、上記範囲の約 12% にすぎない。

行政区画については、南部の一部が枝幸郡浜頓別町に、その他は猿払郡猿払村にそれぞれ属している。

交通は、音威子府から浜頓別を経て稚内にいたる国鉄大北線と、それとほぼ平行に 2 級国道 238 号線が通っている。その他、台地上には、農道が発達している。

## II 地 形

この地域の地形は、三つに分けられる。すなわち、ほぼ平坦な段丘面、波状地形を呈する砂堤列砂丘、および沖積湿原とである。これらは、それぞれ、一つの地質単位ともなっている。

段丘面は、海拔10~20mの高度で、やや解析されている。これは、浅茅野面と呼ばれていて、内陸側に広く分布し、高度も30mくらいまで上るようである。<sup>1),5)</sup>

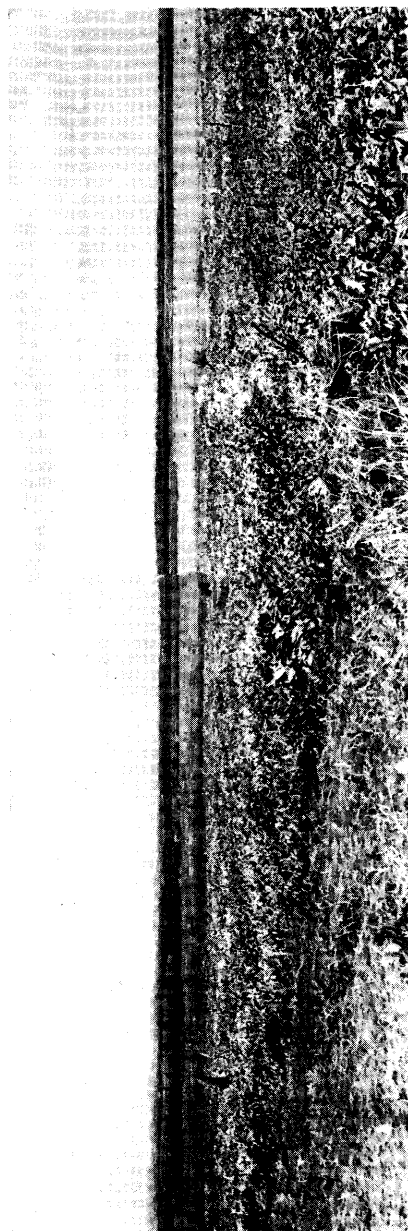
砂堤列および砂丘は、幅0.5~1.25kmで海岸線にそって分布している。高度は5~8mていどである。

沖積湿原には、クッチャロ湖の一部、モケウニ沼、ボン沼など5つの湖沼が点在している。

## III 地 質 概 説

この図幅地域内に分布する地質系統は、第四系だけである。これらは、いくつかに分けられるが、それらは、第1表にしめしたとおりである。

この地域では、浅茅野層より下位の地層は不明である。<sup>1),5)</sup>隣接地域の資料から、浅茅野層の基盤を推定すると、次のようなことが考えられる。すなわち、この図幅の南西にあたる



第1図 浅茅野面と沖積湿原

安別付近では、新第三紀の稚内層が、直接浅茅野層<sup>5)</sup>の下位に分布している。この関係は、この図幅の共和付近まで連続しているとおもわれる。また、浜頓<sup>2)</sup>別図幅内の頓別川河岸には、より古い洪積世の地層が、浅茅野層の基盤となっている。この関係は、クッチャロ湖の東側をとおり、この図幅地域まで分布しているとおもわれる。

第1表 地質総括表

時 代	層 序	記号	
第 四 紀	現 世	海浜堆積物	Ss
		砂 丘	Sd
		泥 炭	M
	洪積世	砂 堤 列	Sn
浅茅野層		Aj	

## IV 洪 積 世

### IV.1 浅茅野層

この地層は、浅茅野段丘を構成する堆積物である。堆積物は、おもに砂および礫から成立っている。砂は、細砂から粗砂にわたり、淘汰が良い。この地域では、上部しか観察できないが、礫はあまり多くない。礫を混じている場合には、一般に偽層が、いちじるしく発達している。礫は、径 10 cm 以下で、3~4 cm 位のものが多い。これらの岩質は、現在の海浜砂礫とほぼ同じで、古期岩類の粘板岩、珉岩、チャートおよび砂岩などが多い。また、扁平な円礫が多いのも特徴である。

<sup>5)</sup>隣接図幅地内の同層の観察によれば、下部では、径 3~5 mm 位の粗砂ないし小礫が



第2図 浅 茅 野 層

多くなり、コブシ大の礫で構成される礫層も、ふくまれているようである。

浅茅野層の最上位には、褐橙色のローム層が、不明瞭な境界で累重している<sup>\*</sup>。このローム層は、北川らによって、ミオホークローム層<sup>1)</sup>と呼ばれていて、夾在する浮石層によって、新旧2層に分けられている<sup>1)</sup>。この地域では、明瞭な浮石層がなく、分離できない。このローム層は、台地中央部では、100~150 cmの層厚であるが、縁辺部では削剝されて、存在しなかったり、あるいは薄くなっている。ローム層の下部は、砂礫まじりのところが多い。

浅茅野層の層厚は、10~50 mと推定されていて、かなり層厚に変化があるようである。この変化は、基盤の凹凸<sup>1)</sup>と考えられている。

この地層は、鬼志別図幅の第3段丘堆積物に相当する。

## V 現 世

### V.1 砂堤列 (Sand Ridge Series)

地形の項でのべたように、この地域の海岸には、幅0.5~1.25 kmの波状地形を呈する部分がある。これは、形態的に砂堤列<sup>4)</sup>と考えられる。

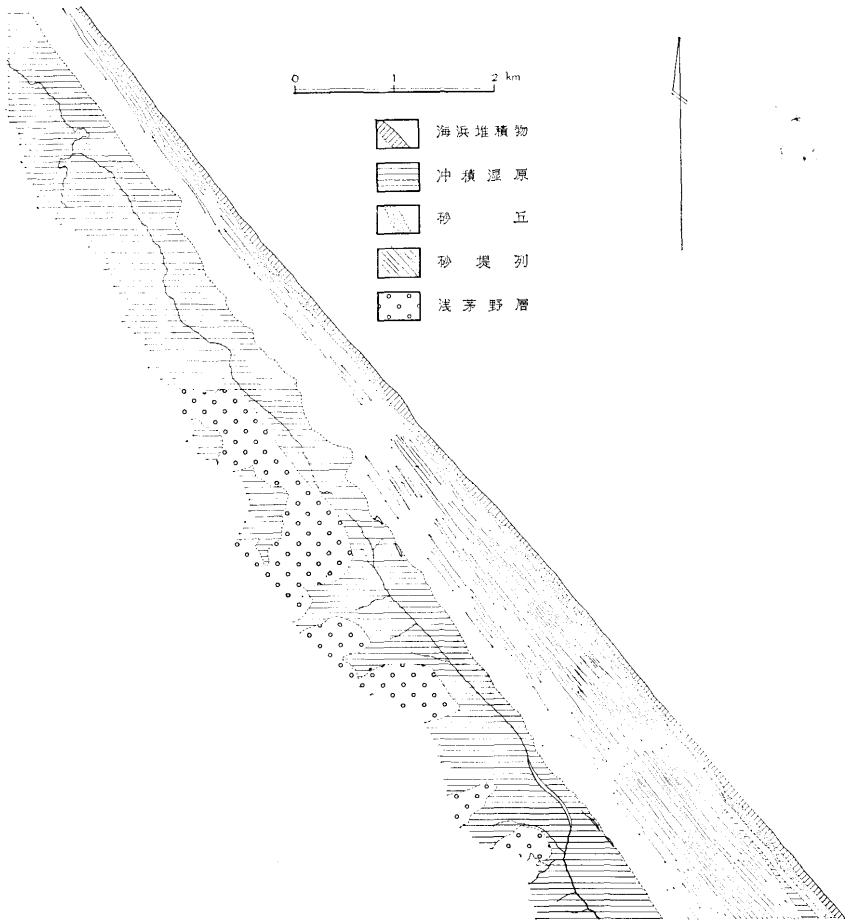
この小起伏の高さは、1 m前後で、各列の間かくは、20~50 mでいどである。航空写真でみると、南部の幅広いところでは、約30列、北部で7~8列の砂堤がみとめられる。一般的に、海側に近づくにしたがって、各列の間かくがせばまっている。第3図にしめたものは、航空写真による砂堤列の分布状況の概略である。写真の精度、植生などの制約で、連続性に欠けるが、実際には、もっと列数も多く、連続しているようである。

全体的にみると、ほぼ平坦な地形である。また、各砂堤の表面で、細粒砂が多いところもあって、一部砂丘に移行しつつあるところもあるようである。一般には、粗砂ないし小礫が多く、水中の堆積物である。

これらは、旧海浜で形成された砂堤が、海域の後退にともない、整列したものと考えられる。

\* このローム層は、当然、浅茅野層から分離されなければならぬものであるが、地質図では、一括して取りあつかった。





第3図 砂堤列の整列状態

## V.2 泥 炭

各河川および各湖沼周辺の低地帯には、泥炭が発達している。全般的にヨシ泥炭が多いようである。隣接地域でおこなった電気探査の結果によれば、この泥炭の層厚は、2m以下である。これより下位には、10~20mの層厚で、粘土ないしシルトが分布している。場所により、砂まじりとおもわれるところもあるようである。

これらは、砂堤列の内側の低地を埋積したものであろう。したがって、現存する湖

沼は、埋め残しと考えられる。

### V.3 砂 丘

まえにのべた砂堤列の一番外側には、新しい砂丘が、形成されている。この砂丘は、砂堤よりやや高く、幅は、10～数10 m位である。北部では、あまり明らかでない。

### V.4 海浜堆積物

堆積物は、砂や礫であって、現在の海浜を構成している。

## VI 応用地質

この地域には、鉱産資源はない。

浅茅野層の砂礫は、路床用砂利として使われている。これは、台地上を掘れば、どこでも採取できる。しかし、なるべく台地周辺の方が、表土およびローム層が薄く、採取条件が良い。

地下水は、浅茅野層の砂礫層中に賦存している。比較的良好な水がえられており、台地上での深度は、10～20 mである。

## 参考文献

- 1) 重粘地グループ(北川他): 東天北地域の表層地質と成因的土壌型(1964)地球科学 No. 75.
- 2) 松下勝秀他: 鬼志別地質図幅説明書(1964)北海道開発庁
- 3) 鳥居栄一郎: 泥炭地深層地下水調査(1962)北海道開発局農業水産部
- 4) 田辺健一: 日本海岸砂丘の形態的分類並に土地利用(1941)地理学評論 Vol. 17. No. 5.
- 5) 松下勝秀他: 浜頓別地質図幅説明書(未刊)

EXPLANATORY TEXT  
OF THE  
GEOLOGICAL MAP OF JAPAN

Scale 1 : 50,000

---

ASAJINODAICHI

(Asahigawa—11)

By

Katsuhide Matsushita

(Geological Survey of Hokkaidō)

Résumé

The area of this sheet map, covering from latitude  $45^{\circ}10'$  to  $45^{\circ}20'$  N, and from longitude  $142^{\circ}15'$  to  $142^{\circ}30'$  E, is located in the so-called Tenpoku district on the Okhotsk sea. Most of the quadrangle is occupied by the sea, the land area being about 12 % of the area.

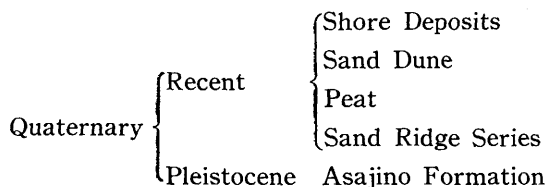
The area is subdivided topographically in to the province of the terrace and that of sand dune and sand ridge series running parallel to the coast line.

At the boundary zone between the two mentioned provinces alluvial swampy land is developed. The highest point, in this area, is about 20 m above the sea.

**Geology**

The geology of this area is represented entirely by the sediments of the Quaternary system, and no other basement rock is exposed. They are shown in Table 1.

**Table 1**



The Asajino formation is composed of sand and gravel in alternation, and makes the flat plain about 10 to 20 m above sea level.

The sand dunes and sand ridge series stretch along the sea coast with an average width of 1 km. The sand dune are developed on the sea shore, while the sand ridge series, in scores of rows, are found along the inland side of the sand dune. Between the two provinces of terrace land and the sandy land, and along the river Sarufutsu and the marshes, there are the swampy plain composed of peat beds.

昭和 40 年 3 月 25 日 印刷

昭和 40 年 3 月 30 日 発行

著作権所有 北海道立地下資源調査所

印刷者 加 藤 博

札幌市北大通西 8 丁目

印刷所 興国印刷株式会社

札幌市北大通西 8 丁目

GEOLOGICAL SURVEY OF HOKKAIDŌ

MASAYUKI SAITŌ DIRECTOR

---

**EXPLANATORY TEXT**

OF THE

**GEOLOGICAL MAP OF JAPAN**

SCALE 1:50,000

---

**ASAJINODAICHI**

(ASAHIKAWA—11)

BY

KATSUhide MATSUSHITA

---

SAPPORO, HOKKAIDŌ

1965